



すきすきわん-

りん
臨

体験版

商店街の装飾は白と赤と緑の三色に染まり、点滅する電飾は、遠く空の上で鈴を鳴らすソリの音を響かせていた。

今年もクリスマスがやってくる。

『あたしのサンタさんへのお願いはね、クロスに新しいおうちが欲しいの!!』

クロスが来たばかりの頃に用意された庭の犬小屋は、わんぱくざかりのクロスが噛みついたり蹴飛ばしたり引つ掻いたりして、すっかりポロポロになっていた。

ユイを背中に乗せられるほど大きくなってしまったクロスには少々窮屈すぎたことから、ユイの言うことは確かにそのとおりでもあったのだ。

『でも、いいの？ ユイちゃん、本当に』

『いいの！ あんな小さいおうちじゃクロスがかわいそうだもん！ あたしのぶんはいから、クロスにお願いするの!』

去年のようにあれもこれも欲しいとわがままを言い出すこともなく、それどころか、自分には何も要らないと宣言したユイに、両親は揃って不思議そうに首を捻るばかりだった。強弁する娘に一旦は困惑したものの、クロスの面倒をみる事で責任感を持つようになった。

たのは、とても良いことであると考えた両親によって、クロスへのプレゼントは一足先にイブの前日に叶えられた。

『やったねクロス！ おつきなおうちだよ！』

——わおんっ！

新しい犬小屋はクロスが横になっても十分なスペースがある広く立派なもので、赤い屋根に白い壁の立派なつくりだった。愛犬の新居に一緒に並び、まるで自分のことのように喜ぶユイを、両親は微笑ましく眺めていた。

クロスの世話をするようになってから、部屋の片づけも庭の掃除も、自分の服の洗濯も、ユイは全部一人でやろうとするようになった。それを両親は——特に母親はとても歓迎しており、ユイにはとても甘くなっていたのである。

——けれどユイにしてみれば、それはごく当然のことであり、

（あたし、クロスのお嫁さんだもん。ちゃんと旦那様のお世話、しなきゃだめよね）

やがてやってくるクロスとの生活のためにも、いまから『お母さん』の練習をしておかなければならない故の、必然の努力なのであった。

去年とは比べ物にならないほどおりこうさんになった妹に、両親はユイへのプレゼント

は欲しいものができるまで延期、という約束をしてくれた。

けれどユイはもう、そんなことで喜んでいる暇などないのである。なにしろ、ユイにはもつともつと待ち遠しいものがあるのだから。

(もうすぐ、だね……)

とくん、とくんとおなかの中で息づく命の鼓動。

ユイは日に日に大きくなるおなかをそつと、セーターの上から優しく撫でて微笑む。

自分の内側に感じられる、確かな生命の息吹。それをはぐくみ育てる母の喜びを噛み締め、少女の頬は自然に緩んでしまう。

少女のおなかの中で息づくのは、大好きなクロスと、一生懸命愛し合った証。何者にも代えがたい二人の絆である。

(もうすぐ赤ちゃん、産まれるよ。……クロス)

ユイはそつと目を閉じて、ふかふかのクロスの毛皮に顔をうずめる。

二人の愛の結晶の誕生は、間近に迫っていた。

「ふう……」

パーティーの余韻に浸りながら、ベッドの上に腰を下ろす。

両親はまだリビングで、突然訊ねてきた大学時代の友人と楽しそうに騒いでいる。知らないおじさんと肩を叩き笑い合う父親や、まるでユイが友達とするように楽しそうにお喋りする母親は、ユイの知っている両親とはまるで違う顔をしていた。

クラスで誘われていたクリスマスパーティーは、塾があるからと言って参加を誤魔化した。最近付き合いが悪いと文句を言うようになった友人達にまた嘘をつく事は少し後ろめたかったけれど――こればかりは仕方がない。

「……はあっ」

ユイはここ何日かそうしてきたように、ベッドの上に横になり、そつとおなかを撫でる。そろそろ服の上からでも目立つようになって、ふつくらとしたおなか。

脚の間に張り詰めるずしりと硬く重い感覚に、胃が圧迫されて食欲もない。最近ではだんだん階段を上り下りするのも大変になってきていた。おかげで昔みたいに男子に混じってドッジボールで遊ぶこともすつかり無くなって、ちよつとストレスもたまっている。

「……………」

最近では、お風呂で裸になってみると、少女のおなかはちようどごはんを食べ過ぎた時みたいにぽこんと盛り上がっているのが分かる。膨らんだおなかを見た目よりもずっしりと重みを増し、いつも重い荷物を抱えているような気分だった。ときどき、あそこがぐう

つと圧迫されるような感覚もたまにやってくるし、オシッコも近くなって、休み時間までに合わなくなってしまうこともあるくらいだ。

おなかがきつくて苦しくて、朝着替えるときにスカートを選んでいたユイに、ほら見なさい、あんなにおやつ食べてばっかりで、やつぱり太ったんじゃない、と口を尖らせる母の顔がユイの頭を掠める。

(ふーんだ。そんなんじゃないんだからねっ!!)

何も分かっていない母に、心の中で舌を出して。ユイはそつとおなかを撫でた。

もつともつと、とつても大切で、とても大事なものが、ここにはあるのに。父も母もそのことをまるで理解してくれない。

ユイの身体の変化は、見た目よりも、身体の内側のほうがもつと大きい。おなかの中はきつく張りつめて、空気をぼんぼんに入れた時のボールみたい硬い手ごたえをしていた。特におへソのあたりは、内側から押されてすっかり格好を変えてしまっていた。たつぷりクロスに愛してもらった結果、ユイのおなかの中の揺り籠はぼつてりと膨らみ、極上の寝心地のベッドと、外の刺激から守る頑丈な壁を作り上げている。

ユイには、確かにプレゼントなんか不要だったのだ。だって、ユイの一番欲しいものはもうちゃんとここにある。

(クロスと、あたしの赤ちゃん……)

ユイがやさしく撫でる、大きく膨らんだおなかの中。

すつかり準備を整えた生命の揺り籠の中にすくすくと育つ生命が、日々その存在感を増している。それがユイにはたまらなく愛おしかった。

今まさに芽吹き、育ち続ける、ユイとクロスの赤ちゃん。とくん、とくんと鼓動を響かせ、すこやかに眠る、なによりも素敵で小さな生命。

姉に見捨てられ、寂しく一人ぼっちだったクロスを、その小さな身体で懸命に受け止め、ありつたけを振り絞って愛した証。なによりも、クロスの事が世界で一番、一番の一番に大好きな、証。

だから、違う。

クロスが一番好きなのは、ずっと離れていたマイではなくて、自分だ。

(お姉ちゃんじゃなくて、あたしが……クロスの、一番なんだから……つ)
ぎゆう、と枕の端を握り締め、ユイは切なげに熱い吐息をこぼす。

それは、■■■■らしく可愛らしい嫉妬であったかもしれない。

大好きな相手が、自分ではない女の子のことをずっと気にしている。それが嫌で、それが怖くて。重く気持ちちが塞いで。そんな風に考えたくないのに、胸の奥から重く苦い塊が、ぐうつとせり上がってくるよう。

「……んう……つ」

嫌な気分を振り払おうとぶるぶると首を左右に振って、ユイは寝返りを打った。ぼうつと熱っぽい頭を枕のうえにころんと転がす。

「はあ……っ」

12月の寒さですっかり冷えたベッドのなかで、頭まで毛布を被って、ぎゅつと身体を丸めながら、ユイはもう一度、大きく溜息をつく。

おなかの中で、とく、とく、と息づく赤ちゃんの鼓動は、日に日にはつきりと感じられるようになっていた。自分が大事な大事な赤ちゃんを育てている、ということに覚える歓びは大きく、毎日がとても新鮮だ。

お母さんに、ママになるための、驚きでいっぱいの日々。

けれど、ユイの胸の片隅には、拭い去れない不安じつとがくすぶっていた。

あの日。電話越しに聞いた姉の——マイの声。それにいち早く反応したクロスの顔が、ユイは忘れられない。

あれ以来、クロスはいつも落ち着きなく庭を駆け回り、ごはんの時も、散歩のときも、お風呂のときもいつだって上の空。ユイが話し掛けても、何も聞こえていないようにそわそわと周りを見回すばかりだ。

「クロス……っ」

胸の奥が切ない。愛しい相手の名前を呼ぶだけで、きゅんと締め付けられるように、小

さな胸が苦しかった。おなかの奥が熱っぽく疼く。脚の付け根は今日もじんつと鈍く痺れ、甘い刺激を求めて少しづつ蜜を分泌している。少しづつ大きくなつたおなかに合わせるように、ユイの身体も変化し続けている。

クロスは、マイの声を聞いてから、いくらユイが誘つても応じてはくれなくなつていた。いつも一緒にいてくれはするものの、それ以上のことはまるでしてくれない。誰も見えないから、とキスをねだつても、まるで興味がないようにぶいとそっぽを向いてどこかに行つてしまう。

(……クロス、どうしちゃつたんだろ……)

今朝の散歩は特にヘンだった。ここ最近、ユイはいつも気分が悪くて、外に出掛けられなかつたのだけど——今日は大丈夫かなと思つて出発した久しぶりの散歩で、いつものように廃屋の裏庭で、秘密のえつちをしようと強引にクロスを誘つたのだ。

けれど、いくらユイが舌を這わせても、指を懸命に動かしても、クロスのおちんちんは少しも反応してくれなかつた。いつもなら何もなくても、ずりりと熱い先端を外に飛び出させて、ユイに飛び掛かつてくるはずのクロスは——小さいままのおちんちんをおなかの中に仕舞いこんで、困惑したように小さな声で吠えるだけだったのだ。

嫌がるクロスに、小さく『ごめんね』とだけ謝つて。ユイはとほとほと帰途に就いた。シヨックだった。クロスがあんなに、自分を避けるなんて。

（クロスは、あたしのこと……嫌いになっちゃったのかな……）

そう考えると、おなかの奥にしくんつ、と鈍い痛みのようなものが沸き起こる。まるで冷たい鉄を飲みこんだみたいなのに、ママになろうとしていてる身体がしくしくと軋むのだ。少女にはまだ理解できない、緑の目をした嫉妬という感情だった。

急に家に戻ってくると言い出した姉——それは、かつてクロスと愛を交わしていた相手だ。クロスがはじめて、身体を重ねた初恋の相手なのだ。

「っ……ごめん、ごめんね……」

知らず、おなかを押さえていた手のひらに力が籠もっていた。パジャマが引つ張られる感触でユイははつと我に返り、慌てておなかから手を離し、できるだけ優しく、そつと撫でさする。

この時期の胎児はとても繊細で、母親の不安を敏感に嗅ぎ取って反応する。もつとも安静にしなければならぬときだ。

早まる赤ちゃんの鼓動から、まだ治まらない動揺を感じ、ユイはそつと語りかける。

「だいじょうぶ……なんでもないよ。いい子だから……ね……？」

小さな身体で精一杯、ユイは母親であろうとしていた。訳の分からない不安と焦燥に押し潰されそうになりながら、賢明におなかの赤ちゃんのことを思いやる。誰もが見知らぬなかで、赤ちゃんのことを大切に思っただけなのはユイだけなのだから。

そうして一人、小さな胸を痛めているうちに、次第に一つの感情が形をとりはじめてゆく。深い混沌とした思いのなかから、次第に輪郭をあらわにしてきたのは——はつきりとした姉への拒絶感。

「——やつぱり、お姉ちゃんが悪いんだよ……」

ぎゅつと枕をつかみ、うつ伏せになつて。おなかを庇いながら、ユイはちいさく、拙い呪詛の言葉を口にする。

「ずるいよ。お姉ちゃん……ずっといなかっただのに、いまさら帰ってきて、クロスのこと……取っちゃうなんて……っ」

とく、とく、と早まる鼓動。赤ちゃんに合わせるように、いつしかユイの胸も高鳴つていた。

ユイの脳裏を、クロスと番つていた姉の姿がかすめてゆく。

何度も何度も声を上げて、クロスの精液を受けとめていた——姉の姿を。

(違う……もんっ)

大好きなクロスに、大切なクロスに、一番すべきなことをしてあげられるのは、自分だけなんだ。あどけない心の中に似合わぬどろどろとした感情が少女の胸の中に渦巻く。

(お姉ちゃん、クロスの赤ちゃん産んであげられないのに。……クロスのお嫁さんになれるの、あたしだけなのにつ……！)

クロスの事は、嫌いじゃない。少しも嫌いにはなっていない。ユイは何度も何度も、自分の心に問いかけてその答えを確認した。

クロスは、ユイのおなかのなかの赤ちゃんのお父さんだ。クロスがユイを大切に思ってくれているのも間違いない。ユイは乙女心に、それをはつきりと確信していた。クロスが父親として、その子供を孕んだ自分を思いやつてくれるのを感じ取っていた。

「お姉ちゃんの、ばか……」

ぼそつとつぶやいて、ユイは枕に顔をうずめる。

ユイとクロスが関係を持つてからまだ二月あまり。一年半の間クロスを独占していた姉に、クロスも心を揺り動かされているのだろうか。そう考えるだけで、なんだか心の中をもやもやしたものがいっぱいになってゆく。

「ばかあ……っ」

ほろほろと。堰を切ったように、ユイの目元から涙が溢れ出す。頬を伝い落ちるしずくはあとからあとからとめどなく、枕をぬらす。

「っ……」

遠く聞こえる、クリスマス鈴の音。

サンタクロースのやつてくる、喜ばしくも大切な日。

二年前。真っ白な毛皮をした、大切なパートナーがやつてきた日。

そして今、大好きなクロスの赤ちゃんと一緒に迎えるクリスマス。

それはユイにとって、なによりも、とてもとても大切な出来事だったはずなのに。だから、嫌なことは考えずに、できるだけ幸せいっぱい、過ごしていたかったのに。

「ぐすつ……ひつく……つ、くろす、クロスう……つ」

だめだと思っても、一度あふれ出した感情はとまらない。次々にこぼれる涙と、喉の奥で押し潰されるような嗚咽が、閉ざされた部屋の中に響く。

この聖なる夜。ユイはただ孤独で。おなかの中の赤ちゃんを抱え、一人きり。会いたいと願う相手の心は遠く、庭で鎖に繋がれている。

「ぐすつ……くろ、す……」

臨月に差し掛かった妊娠後期の疲労と、不安定な心の中で、なお心配をかけまいと気丈に振る舞っていた心と。姉への言葉にできない複雑な想い。飲み込めない混沌とした感情を、吐き出すようにユイは泣き続けた。

そうして、しばし。思い切り感情をあらわにしたことで張り詰めていた緊張の糸が途切れたか。

いつしかユイの意識は途切れ。少女は深い眠りの中に落ちていった。

ぎい……

わずかに軋むドアの音に、ユイはまどろんでいた意識を浮上させる。

冬のこの季節、ドアは乾燥して静かには開かない。なんだろうとゆっくりベッドの上に身体を起こそうとしたユイに、それはがぼつ、と飛び付いてきた。

それは無論のこと、サンタクロースなどではなく、プレゼントを渡すタイミングを見るため、息を潜めてやってきた父親でもなく。

雪のように真つ白な、大きな大きな身体。

「ふあわ!?」

まっしろな毛皮が視界を覆う。いきなりの事に驚いて頓狂な声をあげるユイから、寝惚けまなこが一瞬で吹き飛ぶ。

真つ白な冬毛に包まれた大きな身体が、はっはつと息を荒げ、尻尾を振って、ベッドの上に飛び乗っていた。あつと思ふ間もなく、ユイはその大きな身体にのしかかられ、組み伏せられてしまう。

「く、くろす……!!?」

あおんっ!!

とても、元気の良い返事。

あまりの事にユイは混乱し、その名を呼ぶことしかできない。だって確か、今日はお客さんが来るから、とクロスはできたばかりの新しい家にいるようにと、庭に締め出されていたはずだ。

けれど、丸い目をいとおしげに細め、ぐりぐりと濡れた鼻先を押し付けてくるふかふかの白い毛皮は、まちがうことなくクロスのもの。見れば、クロスのリードは途中で千切られ、脚も泥だらけ。きつと首輪をはずし、庭を回り込んで、勝手口から上がり込んできたのだろう。ママは良くあそこの鍵を閉め忘れるのだ。

それでも大変な冒険だったに違いない。何しろリビングには両親がパーティイを続けているし、気付かれないように柵を乗り越えるのだって簡単なことじゃない（ユイは、クロスがその気になればあんなもの越えられることは知っていたけれど）。

「く、クロス……来てくれたんだ……っ」

ユイの心に、ぼつ、と熱い火が灯る。大好きな大好きな相手が、クリスマスにやってきてくれた。それだけでもう、空っぽに思えていた胸の中がいっぱいになるようだ。

いっぱい元気と、会いたかった気持ちをたっぷりピールするように、クロスは大き

な舌でペロペロとユイの顔を舐め始める。

「あは……く、くすぐったいってばあ……っ」

熱烈なクロスの親愛に、もちろんユイも抗わない。クロスの逞しい肩にそつと腕を絡め、ぎゅつと顔を寄せた。何度も繰り返し元気良く吠えるクロスの声が、ユイの心を解きほぐしてゆく。

大きな身体にベッドの上に押し掛かれるようになって、顔じゅうをよだれでべたべたになるまで舐め回されてしまう。クロスはユイのように手を使えないので、頭を撫でてくれたり並んで手を繋いで歩いたりはできない。

けれど、その代わりにとても上手に鼻先や舌を使って、ユイに気持ちを伝えてくれるのだ。

(クロス……っ)

ユイはそつとおとがいを持ち上げてクロスに口付けた。小さな舌を自分からも伸ばしてクロスのそれに絡め、懸命に出し入れる。クロスがしてくれるのと同じように、自分の気持ちを伝えるために。

くちゅ、ぺちゅ、と粘ついた音を響かせて混じり合う唾液と一緒に、切ない胸が、とくとくと早まる。愛しくてたまらない思いが溢れ出す。

今はただ、少しでもクロスにこの気持ちを伝えたかった。

今日はクリスマス。聖なる夜。恋人と過ごす大切な日でもある。

クリスマスには、子供だけじゃなくて、大人にも大切な意味があることを、ユイは初めて知ったのだった。

「あ……」

不意に、その感触に気付いて、ユイは顔を赤らめる。

シーツの上に押し倒された太腿の間、ゆるやかに膨らむパジャマのおへソの上を、こつこつとつくつく固い感触。そつと視線を向ければ、ユイにじゃれつくクロススの下半身からは、すでにぎんぎんと滾った赤黒い生殖器が突き出していた。

その先は既にべつとりと粘液に濡れ、滴り落ちる先走りがユイのパジャマのおなかの上にとろりと糸をこぼしている。

このひと月ほど、ずつとお預けを食わされたクロススのそれは、もうすっかりと愛撫を受けたように大きく膨らみ、強張って凶悪な形をしていた。

いつもなら、ユイが何度も何度も口と舌で舐めて、やつとこうなるのに——クロススの肉杭の根元は、すでに精瘤を膨らませる兆候すらあった。まるでこの前、お散歩の途中で中断させられてしまったあの続きを、今からしようと言うかのように。

すっかり準備万端、恋人の交わりの準備を整えて現れたパートナーに、ユイはすっかり見蕩れてしまっていた。剥き出しになっている肉槍の先端を見ているだけで、おなかの奥

をずんずん犯されているような錯覚すら覚えてしまうほどだ。

「クロス、ずっと、我慢してたの……?」

わおんっ!!

力強く、吠えて答えるクロス。ユイのパジャマの下腹部に、たつぷりと子種の詰まった生殖器が押し当てられる。力強く滾り反り返る肉杭の根元は、みるみるうちに大きく膨らんでゆく。いよいよ『本当』の姿を取り戻すクロスのおちんちんに、ユイは顔を赤らめた。クロスはすっかり興奮していて、待ち切れないのか軽く腰を振り始めている。

心から自分を求めてくれる、大好きなパートナー。確かに通わせ合った心を通じて、ユイは愛すること愛されることのこの上ない歓びを噛み締めていた。

「クロス、ありがと……あたしも、大好きだよ……!!」

もういちどしっかりとキスを交わして——月明かりの下、カーペットに映る二人の影は、しっかりと一つに溶け合った。

「えへ……もうこんなにおつきくなっちゃったんだよ? 毎日、おなかほこん、ほこつて蹴ったりして……ほら、わかる? えへへ。すごいよね、クロスの赤ちゃん、とっても元

「気だよっ……♪」

パジャマを脱いで、ふつくらと膨らんだおなかをそつと撫で、ユイはクロスに報告する。おなかだけではなくて、ユイの胸もまだ一回り大きくなっていた。今ではスポーツブラではきついくらいで、クラスでも上から数えた方が早いくらい。体育の着替えのときにそれを指摘され、友人からはちよつとうらやましがられたりもした。

でも、これもユイがママになるための準備。

おなかのなかのクロスの赤ちゃんに、ミルクをあげるためなのだ。

つんと尖った胸の先端も、ほの淡い薄ピンクから、鮮やかな桜色へ。

ユイのおなかで赤ちゃんが大きくなるにつれて、少女の身体は日々少しずつ母性を開花させている。身体のあちこちもほんのりと丸みを帯び、どこか艶めかしい。

いとけない少女の身体が、確かに小さな生命を宿し、育んでいることの証であった。

「あは……クロス、くすぐりたいよお……」

その一番の象徴が、緩やかに膨らんだおなかだ。

ちよつど冬が来て、厚着をすることが多くなったため服の上からではまだ目立たないが、こうして一糸まとわぬ姿となったユイの下腹部は、確かにふつくらと柔らかに膨らみを帯びていた。

そこに息づく自らの子供を確かめるかのように、クロスは興味深げに下腹部にぐりぐり

と鼻先をおしつける。パートナーの頭をそつと抱え、ユイは胸の奥に溜まった熱い吐息をこぼす。クロスのヒゲや白い毛皮が柔らかなユイのおなかをくすぐつて、ユイは堪えきれずにくすぐすと笑った。

「ひやう…つ、クロスつ…、だめえ…、んあ、そこ、舐めちや…つ…つ…」

ユイの腕からするりと抜け出して、クロスはユイの下半身、大きなおなかの下へ鼻先を突っ込んだ。荒い息の隙間から長い舌を伸ばして、ユイの股間を舐め始める。

哺乳動物においては、妊娠した雌は発情することはない。動物にとつての性交は生殖が目的であり、子を孕んだ時点でその役目が終わるからだ。

だからこそ、クロスとの交わりはその目的のみに特化し、ただひたすらに膣内射精を徹底し、生まれ落ちたばかりの成熟卵子を受精させ、雌の胎内に着床させることに拘り抜くのである。クロスの行為はひたすらにそれを求めるもので、ユイはただ為すがままにそれを受け入れることが必要だった。

しかし。人間と交わる方法を知り、その快楽を知ったクロスは、愛しい相手の求めに応じるまま、おなかを膨らませたユイに対してはつきりと欲情している。

今こうして、確かに愛の結晶を宿し、母となったユイを、その上でなおクロスは求めた。これはもはや動物の生殖本能では括れない、人と犬との種族を越え、遺伝子の壁を叩き壊して結ばれた確かなる愛の領域なのである。

「ふああああ……っ、や、やだあ……そこ、擦れるう……っ、くちゆくちゆつてえ……っ」
たちまちとろけたユイの唇から甘い声が漏れる。

クロスは執拗に舌を動かし、少女の股間をべちやべちやと唾液で汚す。手指の代わりに自在に動く犬舌の感触は、人間のそれとはまるで違う。世の女性にはこれが忘れられずに愛犬をセックスのパートナーにする者も多いのだ。

まして、マイとの行為で仕込まれ、まだ処女だったユイをあつというまに快感の虜にしたクロスの舌技だ。たちまちのうちにユイはクロスの舌に夢中になった。

少女の白い肌の奥の奥。新たな生命を孕み、ほっこりと湯気をたてそうにほころんだ小さな秘裂だけでなく、その上の小さな突起やヒクつく尿道口、そして小さな双丘の狭間にある慎ましやかなすぼまりまでもを舐め上げる。

点ではなく面での快感は、おなかに子を宿してはいてもまだまだ未発達なユイを容易く快感の先端へと押し上げた。

「あ、あつ、あ、あーっ!!」

甲高い声でびくびくと身体を仰け反らせ、ユイはゆさゆさと大きなおなかを揺すり、脚の付け根にぶしゅうと熱い飛沫を噴き上げてしまう。それをまともに浴びながらひるむこともなく、クロスは愛しいパートナーを、さらなる快感の波で押し潰そうとくるりと体勢を入れ替え、ユイの身体をまたぐように向きを変えた。

すると必然、クロスのおなかから生えてびくびくと震える生殖器がユイの目の前にやってくる。

たらたらと先走りの粘液を滴らせる赤黒いペニスに、ユイは心の底からきゅんと疼く愛しさを感じてしまう。

「クロスっ……」

切なさのまま、ユイは両手に握ってもまだ余るような、大きく長い生殖器を掴み、大きく口を開けて頬張った。熱く滾る肉の塊が、少女の柔頬の中に包まれてぶしゅつと弾け、灼熱の液体を吹き上げる。

「んむっ……すご……っ、クロスの、おつきくて……硬い……ちゅう……るるっ…… あは、……れるっ……つむっ、ここ、いっぱい……クロスのせーえき、詰まってるんだ……」

自分を孕ませた、愛しいパートナーのペニス。無垢なる処女から愛を知る『女』へ、そして子供を宿し育てる欲びを教える『母』へと変身させてくれた、魔法の杖。

どくどくと脈打つ雄の滾りを身体の中に感じる欲びに、ユイは夢中になってクロスの剛直を舐め上げた。もう、はじめての時のようななぎこちなさはもうない。すつかりと馴染んで受け入れる少女の唇は、じゅぶじゅぶと大胆に赤黒い生殖器を飲み込んでいく。

ただひたすらに、愛しい相手に尽くしたい、クロスに気持ち良くなってもらいたい、それだけを思う真摯な愛撫だ。

「んふ、クロス、びくびくつてゆつてる……ガマン、できない？ あは、あたしのおなかとおんなじだね……♪」

その内側に溢れそうなほどの生命の素を漲らせ、いびつに膨らんだ生殖器を、喉奥までくわえ、ユイは口での奉仕を繰り返した。じゆるりじゆるりと太くねじくれた肉槍が桜色の唇の中に抜いては差し込まれる様は、まるでそこを孕ませんとしているかのよう。

濃厚な愛撫はクロスも同じだ。ふくらんだ秘花を鼻先で押し分け、そのさらに奥、柔らかくも繊細な肉壁がたつぷりと蜜を含み、よじれた小さな膣口にまでも、クロスの舌が押し入つてゆく。孕み腹の下、ちゅぶりちゅぶりとかき混ぜられる入り口からは、すでに半透明のどろつとした本気蜜が溢れている。

二週間以上の『おあずけ』に焦らされて、ユイの感度は普段とは段違いだ。

ただでさえ妊娠という現象は女性の身体に発達を促し、感じられる快感も遥かに大きなものとなる。しっかりと胎児が育ち、ユイがその動きを幻ではなく確かな胎動として捉えられるようになって。いとけなさを残した少女は、けれど一人の女性としての成熟を始めつつある。

お互いに生殖器を舐めあう変則的な快感で、それぞれに何度か昇り詰め、先に堪えきれなくなったのはクロスのほうだった。

「あんっ……♪」

ユイとしては、このままクロスの熱く灼けるような精液を飲み干しても良かったのだが（そして十分にそれだけで絶頂に達することができたのだろうが）、クロスはそんな場所でも一滴たりとも自分の遺伝子を無駄にするつもりはないようだった。

再び姿勢を入れ替えたクロスは、ユイの上に覆い被さって漲る生殖器をそそり立たせ、ユイの柔らかな下腹部に肉槍を突き立てんとしはじめた。

ベッドの上に転がされ、大きく開かれた少女の脚の付け根に、ぬめる粘液を撒き散らすクロスがペニスが何度も往復する。ほころんだ花弁は桜色に充血して小さくヒクつき、その奥に熱く太いクロスの滾りを受け入れんと妖しく蠢いている。

あおんっ!!

高々と鳴いたクロスが、自分の組み伏せた雌に、再度己の証を刻み込まんとした瞬間。

「っん、待つて……っ」

ぐい、と今まさに肉の先端に貫かれんばかりだったユイは、残る理性を総動員してクロスを制していた。クロスの先走りと自分の唾液でべたべたになった顔をぬぐい、ゆっくりと腰を持ち上げる。

「ね、待つて、……クロス。こつちからだ、赤ちゃん、びつくりしちゃうから……」

クロスは、部屋に閉じこもり一人寂しく沈んでいたユイを慰めてくれるつもりだったよ
うだが、この状態で正常位を保ちクロスを迎え入れれば、ユイはどうしてもクロスの体重
を全部おなかで受け止めることになってしまう。そうなれば、どうやってもおなかの赤ち
やんにも負担がかかることだろう。

だから、ユイはおなかを圧迫されないよう、クロスの方にうつ伏せになって、おしりを
持ち上げる。この姿勢はこの姿勢で、ひと突きごとに膨らんだおなかを大きく揺さぶられ、
ユイ自身には辛い体勢なのだが——ユイは迷わず、おなかの赤ちゃんののための姿勢を取る。
それが少女に芽生えた母性の発芽であることに、ユイ自身も気付いていたかどうか。

「ね、クロス、こつちから……ね？ あんまり乱暴なの、やだよ？ そつと、ゆつくりで
いいから…… 赤ちゃんに、パパの事、いっぱい教えてあげて……♪」

クロスを愛した証。クロスを大好きになつた証。はじめはクロスとの繋がりとしてしか
認識できなかったおなかのなかの小さな生命は、いまや少女にとつてもかけがえのない宝
物になっていた。

だから。

すすくと育つ赤ちゃんにも、いますぐお父さんであるクロスを知って欲しかった。お
母さんであるユイが、クロスのことをどれだけ好きで、クロスもどれだけユイのことを好
きになってくれていて、こんなにもこんなにも気持ち良くしてくれたということを、少し

でも多く伝えたかった。

これはきつと、赤ちゃんがおなかの中にいる間しか伝えられないことだと、ユイはひとり確信していた。

(続きは本編で)

【奥付】

「すきすきわんこ・臨 体験版」

発行:平成 29 年 9 月 5 日

制作:良い子の諸君!

※作中の登場人物、組織、施設等は
すべて架空のものです。